

『応氏六帖』の資料性

近藤 尚子*

The Background of *Oshi Rinnō*

Takako Kondō

要旨 伊藤東涯著『応氏六帖』は中国の文献からの語を集めた語彙集である。東涯にはもうひとつ『名物六帖』という大部の語彙集があり、『応氏六帖』は『名物六帖』の一時の姿であるとの位置づけが従来なされてきた。しかし『応氏六帖』と『名物六帖』とは構成の点から異なっており、項目の出入りや同一の見出し語に付された傍訓の異同も多数ある。この傍訓の異同に注目し、『応氏六帖』の独自性をとらえようところみた。具体的には「スギダチ（斤斗）」、「インジン（抛墮）」、「ヒルトビ・ヒルガンドウ（白撞）」の三項を選び『名物六帖』や『紀聞小牘』の訓と比較し、さらにいろいろな文献の用例からそれぞれの訓の性格を考えた。その結果『応氏六帖』の傍訓は規範性を考慮に入れる必要がなかったために、特殊なものを継承している反面きわめて口頭語的な、おそらく当時の人々にとって耳近い語を含んでいる可能性があることが明らかになった。今後このような分析を重ね、『応氏六帖』の独自性を明らかにしていきたい。

はじめに

『^{おうしりくじょう}応氏六帖』は江戸時代の漢学者伊藤東涯（一六七〇—一七三六）の手になる、中国文献に出典をもとめた語彙集である。現在十本余りの伝本が知られており、収録されている語数は本によって二千、六千と幅がある。後述するように語は六帖十八箋の意義分類にもとづいて収められている。

東涯にはほかにも同様の語彙集『名物六帖』⁽¹⁾がある。こちらは東涯の生前から増補の努力が続けられ、死後は門人の奥田士亨、さら

に東涯の子の東所に引き継がれ、一部が刊行されている。古義堂をあげての完成への努力が続けられたわけで、『名物六帖』の名は、刊行以前からすでに名高かったようである。辞書として『名物六帖』をみると、意義分類を貫いているという点で他書とは袂を分つ。『名物六帖』は六帖という数は同じではあるが、十三箋であり、その点で『応氏六帖』とは異なる。そして、たとえば天文箋はさらに天度運行・日月星辰・雨露霜雪・風雷雲霞・陰陽祥變の五つに下位分類されているのである。江戸時代に刊行された『合類節用集』、『和漢音釈書言字考』でも天地（『書言字考』は乾坤）、時候など、

* 本学講師（今野 尚子） 国語学・日本語教育

まず大きく意義分類を施している。しかし、それぞれの内部は傍訓のイロハ順に排列されているのである。これらの辞書から求める語を見出すためにはその語が何門に属するかということ、その語の訓とを留意しなければならない。『名物六帖』の影響を受けたことを指摘されている『雑字類編』⁽²⁾においてもイロハ別にしたうえで、内部を天門・地理・時令など十八門に分ける。これらの書においては、すくなくとも排列の点において見出し語の表記と傍訓との結びつきを絶対的なものととらえているとみることができる。排列に傍訓のイロハ順をもちこんでいる点は、唐話辞書類中、岡嶋冠山の『唐譯便覧』も同じである。たとえば「イ字部」は「越更壯健欽羨欽羨」を最初に掲げるが、これはこの句に添えられた訳「イヨ／＼オタツシヤニテ。ウラヤマシク候」の文頭の「イ」によってここに収められているのである。

漢語を収集・排列しようとする場合には、もうひとつ、見出し語の表記に排列の基準を求める方法がある。『徒杠字彙』、『画引小説字彙』、『支那小説字彙』、『俗語譯義』などは見出し語の頭字の画数順に語を排列する。『俗語解』は見出し語の頭字の音をイロハ順にする。たとえば「白話」はハ之部、「翻金斗」もハ之部、というように。先述の岡嶋冠山の他の著作『唐話纂用』、『唐話使用』、『唐譯雅俗語類』などは「二字話・三字話」のように、見出し語の文字数による分類を行なっている。素朴ではあるが、やはり見出し語を中心とした排列である。

このように見てくると、意義分類を貫いた『名物六帖』の排列方法は空前であり、以後の書にもほとんど受け継がれていない。その中で、釈大興の『学語編』⁽³⁾は凡例に『名物六帖』の名をあげ、排列

も同様の意義分類を貫く。しかし、小本二冊仕立ての簡略なものでも『名物六帖』には質・量ともに及ぶべくもない。

また『名物六帖』に収録された語を節用集などと比較してみると、感じるのは、東涯の収集意図が総ばな的に語を集めることなく、選択の意志が強くはたらいっているということである。

東涯の目的の第一は、中国側の文献を博搜し、いろいろな意味で特色のある語を収集することにあった。それは東涯のノート類をみても明らかである。収集した語（つまりこれは中国側の語）が、日本側で何にあたるのかを示すために付したのが傍訓である。刊行された『名物六帖』ではほぼすべての語に訓が付されているが、たとえば『応氏六帖』では訓のない語も多数存在する。その意味で、東涯の語収集における付訓という作業は二義的である。極言すれば、ある漢字表記が日本語で何にあたるかがわかりさえすればよい。そのために『名物六帖』は訓のイロハ順という排列基準を採用しなかった。漢字表記と傍訓との結びつきを絶対のものとは考えなかったからである。

その姿勢ゆえに「単に漢語辞書としてだけでなく、東涯のころの京都の日常語を知る資料である」⁽⁴⁾とも評価されているが、従来必ずしもよく利用されているとはいいがたいのである。⁽⁵⁾

翻って『応氏六帖』に目を移せば、そこに『名物六帖』の原点を見出しうることはもちろんであるが、そこに収録された語に目を配るとき、『名物六帖』とは異なる国語史上の価値を認めることも可能である。『名物六帖』が刊行を目指して古義堂をあげて増補されていたのに対して、『応氏六帖』は刊行とは無関係に伝えられた。写書者が手を加えることも比較的自由であった。このような異なり

は当然内部にも反映されるであろう。

『名物六帖』と『応氏六帖』との関係についてはすでに中村幸彦氏によって「応氏六帖は名物六帖の一時の姿を伝えるもの」という指摘がなされている。しかし『名物六帖』についてさえ、収録されている語の性格、あるいは傍訓の位置づけなどが充分に検討されているとはいえない。まして『応氏六帖』については「名物六帖の一時の姿」という位置づけのままに放置されていたといっても過言ではない。たしかに『応氏六帖』と『名物六帖』とはどちらも伊藤東涯という一人の人物の類聚の意志を契機として成立しており、共通点が多い。しかし両者の関係は、『応氏六帖』に項目を増補していけば『名物六帖』になるという単純な図式ではとらえられない。すでに中村氏も指摘しているように基本的な構成においてもこの両者は異なっており、ある段階で根本的な改変の手が加えられたと考えられる。両者の帖と箋との構成を示しておく。

応氏六帖 名物六帖（＊は写本のみ）

第一帖	天文箋	天文箋
	地理箋	時運箋
	宮室箋	地理箋
第二帖	人品箋	人品箋
	積属箋	
	神鬼箋	
第三帖	人事箋	宮室箋
	身体箋	器財箋
	病疴箋	飲饌箋
		*服章箋

第四帖 飛禽箋 人事箋

走獸箋

虫魚箋

第五帖 樹木箋 *身体箋

草花箋

金石箋

第六帖 器用箋 *動物箋

食服箋

顔色箋

本稿は、「斤斗・抛墮・白撞」の三語をとりあげ、『応氏六帖』と『名物六帖』との比較を通して、『応氏六帖』の国語資料上の価値の一端を明らかにしようとするものである。とりあげた三語は、両書間で同一の見出し語に異なる傍訓の付されている約三百語の中から本稿の目的に添って選んだものである。

『応氏六帖』諸本のうち、筆者がこれまでに調査しえたものはつぎの十本である。諸本の書誌的関聯の詳細については別稿を参照されたい。⁽⁸⁾

- イ 国立国会図書館本（清水本）
- ロ 静嘉堂文庫本
- ハ 神宮文庫本
- ニ 早稲田大学図書館蔵本
- ホ 山田忠雄氏蔵本
- ヘ 無窮会本
- ト 刈谷市立図書館本
- チ 長澤規矩也氏蔵本（唐話辞書類集底本）

東京大学本（黒川本）

又 多和文庫本

収録語数は静嘉堂本が約二一〇〇で最も少ない。静嘉堂本は他の九本とは収録されている語の傾向が異なっており、早い時期に他本とは別れた別の系統と考えられる。増補本系の長澤本黒川本が約六〇〇〇で最大、残る七本は二五〇〇前後の項目を有し、内容の点からみても近い関係にある。その中で清水本は宝永三年の識語をもち、書写年次の明らかな伝本の中では最も早い時期のものであり、内容的にも他の諸本よりも原態に近いと判断できるところがあることが調査の結果明らかになった。今回の考察は、『応氏六帖』については国会本を中心とし、必要に応じて他の諸本に言及する。

I
スギダチ
(斤斗)

『応氏六帖』は諸本すべて

斤斗スキタ 〔祖庭事苑〕(9)

とあつて異なるが、早大本のみは排列に改変を加えているため、掲載順は異なるが、項目そのものは他の諸本と同じである。ところが『名物六帖』では、見出し語も出典もまったく同じこの項目

トシホカヘリ
斤斗〈祖庭／事苑〉

とあって、「トシホカヘリ」という傍訓が付されている。『名物六帖』では同じような意味をもつ語が前後に加えられており、直前の項目は「筋斗（トシホカヘリ）／典藉／便覧」、直後の項目は「躍（ワズレ）圈斗（トシホカヘリ）」で、こちらには『熙朝樂事』からの引用がある。「筋」は『字彙』に「今

俗多作斤字」とあるから、「觔斗」は「斤斗」と同じである。孫悟
空の乗る雲が「觔斗雲」である。『名物六帖』の「斤斗・觔斗・觔
斗」はいずれも音読すると「ギント」となる語で、これらに「トン
ボガエリ」という訓が付されているのである。したがって、『応氏
六帖』と『名物六帖』とでは、同一の見出し語に対して「スギダチ
と「トンボガエリ」という異なる傍訓が付されているということに
なる。

まず「スギダチ」について考える。

『中華若木詩抄』卷下に、晏同叔の「上竿奴」という詩とその抄とが収められている。詩の第一、二句はつぎのようである。

百尺竿頭タル身
足騰跟倒アシアガリコフラサカシマニノ駭カス傍人ヲ

この「足臑跟倒」についての抄の中に「杉立チ」の語がみえるのである。

又足臑跟倒トハ。竿ノ上ニテ。足ヲアケテ。サカサマニ立ツソ。
日本ニハ。サカサマツブリ。立ツルトモ云イ。杉立チヲスル
トモ云フ也。アブナイト云テ。傍人カ驚ク也

「足ヲアケテサカサマニ立ツ」ことを日本では「サカサマツブリ立ッル」とも「杉立チヲスル」ともいうとしている。つまりこの「杉立チ」は倒立のことと考えられる。

また『私可多咄』⁽¹⁾にはつぎのようにある。

あるしハ少もさハかすしてよく吟味ぎんみあれハ旧冬きゅうとうのすゝはきにた
ゝミをつミかさねて其上そのうへにて僕共ぼくどもの杉立すぎだちしたる足のうら天しや
うへとゝきどろのつきたるのにてありしなりめつらしき事もあ
まりに物をふしきに思ひ氣にかくるは損なり

ある広間の天井の板に人の足跡の形の泥がたくさんついているの

を元旦に見つけたこの家の主人が、むやみに驚き怪しんで騒ぐ人々に種明かしをしているところである。畳を積み重ねた上で「杉立」をしたら足の裏が天井へとどいて泥がついたというのであるから、この「杉立」もやはり「倒立」のことと考えられる。『俚言集覧』⁽¹²⁾は「杉立」の項に「棒立の事也」と解説を加えたうえで「シカタハナシ」のこの例を引いている。「棒立」ではあっても、この例から考えればここは逆さになった「棒立」ととるべきであろう。

『大子集』⁽¹³⁾にはつぎの句がみえる。

三輪にて

三輪山で杉立するや春霞 親重

こちらは三輪山↓杉の連想を用いた句である。春霞が逆立ちしているかどうかはわからないが、春霞が三輪山のあたりにじつとどまっている情景を表現しているのであろう。

『名物六帖』の中にも「スギダチ」はみえる。人事箋中「猿騎戯」^{キョクバシゲイ}について「臥騎・倒顛騎」があり「倒顛騎」に「スギダチノリ」という訓が付されている。「倒顛」は「顛倒」と同じで逆にするものであるから、これも「倒立」のこと。「倒顛騎」は馬の上に「スギダチ」つまり「倒立」して乗ることである。

「スギダチ」は「杉立」という表記にも表われているように杉のようにすっきりと動かずに立っている状態を表わす。『中華若木詩抄』や『私可多咄』、『名物六帖』の例は「スギダチ」の語自体に「倒立」の意味が含まれているととれる。頭を下にし、足を上に伸ばした人間の姿が杉の三角形の樹形を連想させたのであろうか。

さて、『応氏六帖』、『名物六帖』共通の典故である『祖庭事苑』⁽¹⁴⁾には「斤斫木具也。頭重而柄輕、用之則斗転。爲此枝者似之。」と

ある。『祖庭事苑』のこの部分は『広本節用集』⁽¹⁵⁾にも引用されている。ただし『広本節用集』の見出しは「筋斗」である。

筋斗^{キント}へ事苑第七^二斤、斫^キ木具也頭重而／柄輕。用^レ之則斗轉^{スチハカル}爲^ニ此枝^ツ者似^レ之也^一

「筋斗」、「斤斗」が斤の「斗転」するところに由来する名であるという「祖庭事苑」の説によれば、じつと立っている「スギダチ」との結びつきには疑問が生じてくる。現代語の感覚でみても「トンボガエリ」のほうがふさわしいようである。

「トンボガエリ」の語はすでに『古今著聞集』⁽¹⁶⁾にみえる。

父大納言（中略）はじめ御簾をあげて格子のもとをよせかけられたりけるに、成通卿いまだ若かりけるに、庭にて鞠をあげられけるが、鞠、格子と簾の中に入るに、つぎて飛いられるが、父の前、無骨也ければ、鞠を足にのせて、その板敷をふまずして、山がらのもどりうつやうに飛かへられたりける、凡夫のしはぎにあらざりけり。「我一期に、此とんぼうがへり一度なり」とぞ自稱せられける。

（卷十一 侍従大納言成通の鞠は凡夫の業に非ざる事）

「山がらのもどりうつやうに飛かへ」ったことを「とんぼうがへり」といっているのであるから、体を空中でどのように回転させていると考えられる。

『申楽談儀』⁽¹⁷⁾にも「蜻蛉返り」はみられる。

田楽の風体、はたらきははたらき、音曲は音曲とするなり。並び居て、かくかくと謡ふなり。入り替はりては、鼓^{ツヅム}をも、や、ていていと打ちて、蜻蛉返り^{シバガヘ}などにて、ちやくちやくとして、さと入るなり。

引用した新潮日本古典集成の「蜻蛉返り」には「早業の一つ。」という頭注がある。先に引用した『古今著聞集』でも、引用部分のあとに成通が「はやわざ」を好むという表現が二度使われている。

このように早くから例のみられる「トンボウガエリ」であるが、「筋斗・斤斗」との結びつきはそれほど古いことではないようである。

『元亀二年本運歩色葉集』⁽¹⁸⁾には
筋斗^{モンドリ}

がみられる。これは「もどりうつ」が「もんどりうつ」に変化した「モンドリ」であるから、『祖庭事苑』の註記にあう。⁽¹⁹⁾

ところで「筋斗（斤斗ではなく）」と「トンボガエリ」との結びつきは、唐話辞書の類に多く見出すことができる。岡島冠山の『唐譯便覧』⁽²⁰⁾にはつぎのようにある。

翻筋斗^{ベンシヤウ}墮下馬^{トゲカマ}來打傷了身軀^{ライダウシヤウシンキヤウ}ヘトン／ボウ／反^{カヘリ}ゾ。馬ヨリ落テ。身／ヲ打ソンザシタ^{ミヲウチソンザシタ}

「翻筋斗」の表記ではあるが、これに「トンボウ反」という訳があてられている。

『俗語解』⁽²¹⁾には「金斗・筋斗」の両形を掲げる。

翻金斗^{ベンキン}ヘトンホウカヘリスル「言鯖云——伎人以頭委地而翻一跳过／且四面施轉如毬謂金斗相傳趙簡子殺中山王命厨人——以繫之字義所起由此」

翻筋斗⁽²²⁾ヘ金筋音通ス

『俗語譯義』⁽²³⁾にも
翻筋斗⁽²⁴⁾ヘトンボフガエリスル「也。筋斗⁽²⁵⁾モカク教坊記／曰——絶倫⁽²⁶⁾縁長竿例立」

とある。『教坊記』の引用の最後は「倒立」を転写の際に誤ったのであろうが、ここでも「トンボフガエリスル」と注されている。『画引小説字彙』⁽²³⁾にも「(翻)筋斗」⁽²⁴⁾が掲げられ、「トンボウガエリ」とある。

また、『水滸伝』に「翻筋斗」という表現が使われていたために、水滸伝中の語を集めたものには数多く立項を見出すことができる。たとえば『忠義水滸伝「語解」』⁽²⁵⁾は、長澤規矩也氏によって東涯門下の穂積以貫が編んだとされているが、その中にも

翻筋斗⁽²⁶⁾ヘトンボガヘリ⁽²⁷⁾とみえる。

すでに『名物六帖』との関連が指摘されている『学語編』⁽²⁶⁾では「筋斗」の見出しに対して右に「トンボガヘリ」、左に「キント」を付す。註の末尾に「筋ノ字或ハ金巾ニ作ル」とある。『雑字類編』⁽²⁷⁾は「斤斗。筋——翻——」としている。

読本などの類では『南総里見八大伝』⁽²⁸⁾に「筋斗る」という動詞の形で使われている。

某矢庭に跳^{スカカシ}、菟^ウて、一賊^{ヒトリ}が袷上搔^{スリガミ}、引^{ヒキ}戻して挫^{ヒキ}胡^コせば、残る兩賊^{フタリ}駭^{オドロク}、怒^{イカリ}て、打んと拳を閃^{ヒラめ}かす。下を払ふて筋斗^{スズ}らせ、起んとしたる初の一賊^{ヒトリ}を、又搔^{スリ}廻^{マユ}て裡面^{ウラオモテ}へ投^ナ込^ミみ（下略）

（第三十八回）
腕^{ウデ}を丁^{チヤウ}と拿^{トル}詰^{ツめ}て、撞^タと投^ナたる修煉^{シュレン}の拳法^{ケンポウ}に、縁^エ頬^ホの簀^ス戸^ド打倒して、遙^{ハナ}に庭^{ニハ}の中央^{チュウオウ}へ、筋斗^{スズ}りて、「あな疼^{いた}し、痛^{いた}し〜。」と（下略）（第四十回）

『八大伝』で興味深いのは、ここに掲げた第三十八回の例が「筋斗⁽²⁹⁾」の初出なのであるが、それ以前に「筋斗」が二例あり、いず

れも「筋斗をうつ」と読まれていることである。

當下寂寥肩柳は（中略）矢庭に刀を奪取り、身をひらかして礮と砍る。掌の牙に左母二郎は、筋斗を撲て倒れけり。

（第二十八回）

鹹四郎が閃す拳と共に、足を巢ふて筋斗を打し、続けて蒐る孟六と、均太が腕を振揚て、（下略）（第三十五回）

これをどのように位置づけるかは、また改めて考える必要がある。

『妙竹林話七偏人』にも「筋斗」の例がみえる。

源兵衛、此時これを見て、「キヤアツ」と言ひさま、両手を伸べ、一生懸命茶目吉が胸のところを突きめせば、不意を打たれて茶目吉は、茶台も茶わんも投り出し、仰向けさまに筋斗障子のところへ転がるゆゑ（下略）（五編上）

唐話の流行が契機となつて、「筋斗」と「トンボガエリ」との結びつきが定着したのではないだろうか。この中で、『名物六帖』をどのように位置づけるべきか。『名物六帖』の「筋斗・斤斗」を収める人事箋は安永六年（一七七七）に刊行されている。東涯の没後四十一年の年である。

ところで、天理図書館古義堂文庫には『紀聞小牘』二十九冊が蔵されている。すでに中村幸彦氏が「東涯青年時よりの読書抄記」とし、『応氏六帖』成立までの「準備期を知る資料」と指摘しているものである。この『紀聞小牘』の第五冊に注目すべき事実がみられる。「斤斗」が『広本節用集』とほぼ同じ形で、『祖庭事苑』の説を引いて掲載されているのだが、右の「スギダチ」の訓が抹消され、左に「トンホカヘリ」の訓が付されているのである。もっとも、厳

密には「ホンホカヘリ」の第一字目の「ホ」を「ト」に訂正してあるのだが、いずれにしても「スギダチ」を「トンホカヘリ」に訂したことは間違いない。『紀聞小牘』第五冊には「筋斗」も採録されている。こちらには傍訓はないが『教坊記』からの説を載せる。『俗語譯義』よりもかなり詳しい。それによると、へ一小兒——絶倫上衣以／繪綵梳洗雜於内枝中少頃縁長竿倒立／尋去手以足掛竿久之垂手翻身而下とある。へ中華若木詩抄の「上竿奴」と同様の、竿の上でいろいろなわざをする「はしご乗り」のようなものであらう。東涯は『祖庭事苑』や『教坊記』の説を読んだうえで、「斤斗」に「スギダチ」という訓をひとまずは付したと考えられる。同じ『紀聞小牘』の第九冊に、『郷談正音』から抜き書きした箇所があり、そこに

抛番斗郷打筋斗正

とあるのも、同じ理解を示しているものと考えられる。『紀聞小牘』は第五冊が元禄七年、第九冊が元禄十四年の識語をもつ。第五冊の「スギダチ」から「トンホカヘリ」への訂正がいつ行われたものかは明らかではないが、元禄年間に東涯自身が「斤斗・筋斗」＝「スギダチ」と理解していたことを『応氏六帖』は反映していると考えられる。「斤斗」と「スギダチ」との結びつきは特殊であるにもかかわらず、『応氏六帖』においてはそれが継承された。そして、その後の「トンホカヘリ」への訂正を『名物六帖』は受け継いでいるのである。近世において一般的であったと思われる「斤斗」と「トンボガエリ」との結びつきを、『応氏六帖』諸本がひとつも取りいれなかった理由は明らかではないが、『応氏六帖』が出版から終に自由であったことがかわっているのではないだろうか。つまり、

刊行を念頭においた反省的な見直しが行なわれなかったために、「スギダチ」がそのまま継承されたと考えるのである。

II インジン（抛墮）

『応氏六帖』人事箋に収められている。諸本すべて見出しは「抛墮」。傍訓は無窮会本のみ「イシヂン」、他の八本は「インヂン」（早大本・長澤本・黒川本）、インジン（清水本・静嘉堂本・神宮本・山田本・刈谷本）である。註は静嘉堂本に「丹鉛總録 飛瓦石之戲」とあるのみで、他の諸本にはない。また、無窮会本はこの人事箋において、一部の項目に下位分類のための符号をつけており、この「抛墮」には「節序」に分類することを示す符号、が付されている。この、は、ほかに「傳座・除殘・走解・躡柳・潑散・照虚耗」に付されており、「節序」は節季ごとの行事であると考えられる。さらに早大本では、項目を分類したうえで排列を改変しており、その中で「節序」関係の項目は箋の最初に集められている。この早大本でも「抛墮」は「節序」に含められている。以上『応氏六帖』の諸本の状態から「インジン（抛墮）」は年中行事のひとつであると考えられていたことがわかる。

ところで、安原貞室の『かたこと』⁽³¹⁾に、つぎのような記述がみえる。

一 印地といふべきを。あんぢんといふハ如何。飛礫をうち侍る場の。陳場に似たるとの僻心得にて。あん陳と誤りけるにや。印地とは。うてる飛礫の跡の地に付て。印を残したるやうのこゝろ成べしと云り。（以下略）

右の記述の「あんぢん」が『応氏六帖』の「インジン・インジン」のことと考えられる。すなわち「抛墮」は「印地」と同じものをさす。しかも「あん陳」は「誤り」だとしているのである。同じような解釈は『蜺縮涼鼓集』⁽³¹⁾にもみえる。

あんぢ 印地 〈五月五日／俗云あんぢん誤也〉

ここでも「あんじん」は「誤也」とされている。

「印地」とは印地打のことで、石を投げあう遊びである。これについては詳論がすでにあるので詳細はそちらにゆずり、ここでは簡単に述べるにとどめる。⁽³²⁾まず『平家物語』⁽³³⁾にはつぎのようにみえる。

知康返事にをよばず、院御所に歸りまいて、「義仲おこの者で候。只今朝敵になり候なんす。いそぎ追討せさせ給へ」と申ければ、法皇さらばしかるべき武士には仰せで、山の座主・寺の長吏に仰せられて、山・三井寺の悪僧どもをめされけり。公卿殿上人のめされける勢と申は、むかへつづて・いんぢ、いふかひなき辻冠者原・乞食法師どもなりけり。（巻八 鼓判官）

木曾義仲を追討するために法皇がお召しになった比叡山・園城寺の悪僧に並ぶのが、公卿殿上人の召した「むかへつづて・いんぢ、いふかひなき辻冠者原・乞食法師ども」であった。引用した古典文学大系の当該箇所頭注には「向え礫や印地を得意とする賤民が當時賀茂河原あたりに巢食っていた」とする。『義経記』などの例をみても、印地はならずものと結びつけてとらえられていたようである。

室町時代になると印地は五月五日の遊戯としても行なわれるようになっていたらしい。

『節用集』の類では、少異があるものの多くの本で「印地」・「因

地」の両形を掲げ、註は「五月五日世俗戲闘諺」という内容である。

先の『蜺縮涼鼓集』にも「五月五日」とあった。

歳時記においても、印地は端午の節句にちなむものとされている。⁽³⁴⁾『俳諧初学抄』には

一端午節 左近右近の馬場騎射 しやうふふく 菖蒲かたひら同

刀 いんちへ付かみのほり ちまき

とある。『山之井』・『増山井』・『俳諧新式』・『俳諧歳時記彙草』などでもやはり五月五日の行事としている。印地は、時には流血の惨事にまで至るほどエスカレートし、中世以来しばしば禁止されながら、子供の遊戯として江戸時代まで生き残った。しかも端午の節句の行事としてはボビュラーなものであった。『応氏六帖』が「抛墮」を「節序」の項目として認識していることにはこのような背景があったのである。

しかし、ここまでに掲げた例は、見出しとしてはすべて「インジ」（ジとヂとの異なりはここでは問わない）の形であった。『かたこと』と『蜺縮涼鼓集』にみられた「めんちん」はいずれも「誤」りとされていた。しかるに『応氏六帖』では、無窮会本の「イシデン」を除き、すべて「インジン」である。「インジン」をどのように考えるべきか。

前掲の『かたこと』には「飛礫をうち侍る場の。陳場に似たるの僻心得にて。めん陳と誤りけるにや」とあった。『時代別国語大辞典室町時代編』一の「いんち」の項には、「印」と「因」との用字に関して「意識が用字面に反映したとも解せられる」とする。しかし節用集などで「ーヂ」の部分はすべて「地」であったために、この部分については言及されていない。ところが漢字表記の中に

「陳・陣」の字を用いた例を見出すことができるのである。

『和漢音釈書言字考』⁽³⁵⁾は「時候門」の下に「印地打」を掲げる。

註に「又作茵陳」。端午ノ戯闘。／朝鮮ノ人謂ニ之ヲ石戦之戯トとある。ここに「茵陳」という表記がみられるのである。

また、『和漢三才図会』⁽³⁶⁾には「飄石」の項に「陰陳」という註記がみえる。

飛礫 △按飛礫、擲ニ瓦礫ヲ傷レ人也端午ノ日村民兒童阻レ川ヲ飛

ニ瓦石ヲ或用テ飄石ヲ終日闘争ス謂ニ之陰陳ニ毎歳含價ヲ至ニ大ニ傷

ナレ人ヲ近世有ニ禁令一停ニ止之

「インヂ」という訓が付されているが、漢字表記は「陰陳」である。

また、『武徳安民記』⁽³⁷⁾には「陰陣」の例がみえる。

小西行長晒笑テ申ケルハ（中略）今日ノ敵ハ後ノ大事ヲ頼テ競

ヒ進ム處ヲ足入ノ地形ニテ敵進退心ニ任セストハ云ナカラ猥リ

ニ是ヲ追ケルユヘ再ヒ追返サレ又守返シ偏ニ河原陰陣菖蒲切ノ

風情論スルニ足ラス（卷二十）

合戦の推移を「河原陰陣菖蒲切ノ風情」と評しているが、この「河原陰陣」は印地のことであろう。

以上「茵陳・陰陳・陰陣」の例はいずれも音読すると「インジン」となる。石を投げ合って戦う、というところから、出陣・陣屋・陣鐘など合戦に縁の深い「陣（陳）」⁽³⁸⁾の字をあて、それが契機となつて「インジン」というよみが行われるようになったのかもしれない。

『東臚子』⁽³⁸⁾にはつぎのようにある。

印地打の兒童の戯は、清家筆記の和論語に、因陳と書たる處あり。今にも浪花近き神島と云處には、印地打をせり。京師の

小兒、柳の枝を以つくる印地の棒を、ちん／＼の棒と誤りて稱せり。(中略) 子幼き頃迄は、ちん／＼の棒とて、上巳端午等には翫物とせり。元來大打にて、犬追物を戲擬せりとぞ。

「インジ」を京都の子供達が「ちん／＼」と称した、というのである。そしてそれを「誤りて」ととらえている。『日本国語大辞典』はこれに「陣陣」の漢字をあてる。「ちん／＼」までは変化していない「インジン」も、あるいはこれが端午の節句の遊戲として定着してきたこととかかわっているかもしれない。おそらく口頭語としてはよく使われたのであろう。『かたこと』や『蜩縮涼鼓集』の言及が逆にそれを裏付ける。しかし刊行に際して傍訓として掲げるためには採用されにくい語形だったのではないだろうか。それを『応氏六帖』は傍訓として掲げている。

『名物六帖』には「抛墮」はなく、かわって「抛塙」が掲載されている。「塙」はもともと磚を投げる遊びの意で、「抛塙」のほうが正姿である。傍訓は「イシウチ」で、『升庵集』からの註がある。「抛塙」の直前には「打瓦」があり、「見下」と註されている。

『紀聞小牘』には、第一冊、第二冊に「抛塙」がみえるが、どちらにも訓は付されていない。

『名物六帖』が出版に際して「ツブテウチ・イシウチ」を選んだのに対して『応氏六帖』が「インジン」を継承しつづけたことは示唆的である。『応氏六帖』について、きわめて口頭語的な訓を含んでいる可能性を考えることができるからである。

なお、『応氏六帖』無窮会本の「インデン」は「インデン」と「イシウチ」とが混淆したものと考えられる。

Ⅲ ヒルトビ・ヒルガンドウ（白撞）

『応氏六帖』諸本では、増補本系の長澤本・黒川本とその他の諸本とで傍訓が異なっている。

清水本・静嘉堂本・神宮本・早大本・山田本・無窮会本・刈谷本は諸本ほぼ異同なく、

白撞同上

である。ただし静嘉堂本は「同上」の左に「スリ」とある。

いっぽう、長澤本・黒川本では

白撞同上

とあり、『応氏六帖』には「ヒルトビ・ヒルガントウ」の二種の訓がみられる。

「ヒルトビ」は「ひるとんび」と同じものであろう。『物類称呼』の「ぬすひと」の項にはつぎのようにある。

○須利東國にていふへすりはぬすびとの梵語／也とぞ又三才図會

ニ一説有略ス江戶にてきんちやくきりと云上総にて。さからといふ撰州にて。ひるとんびといふへとんびは薦也ものをさらふと云心と／かや東國にてまれ／にかくもいふ也

撰州では「すり」を「ひるとんび」という、というのである。「スリ」と「ヒルトビ」との結びつきは『応氏六帖』静嘉堂本の註にもみられた。

人の形體も五倫五體お定ちやア奇くねえとか云て、是にも流行があつたらひよんな物だらうよ、(中略) 後の方にも眼があらば、お先供の傍よれもいらす、昼蔭の用心にもよしと、眼の

孔を前後へ通しに明けるのさ。

『四十八癖』四⁽⁴¹⁾

この例もやはり「すり」に対する用心がいい、といっているのであろう。『物類称呼』に「とんびは蓆也ものをさらふと云心とかや」とあるところからも考えられるように「ひるとんび」には、相手に気づかれないうちにかすめとる、というニュアンスがある。それに比して「ひるがんだう」の例のほうは、もう少し凶悪なようである。

源九郎舟よりあがつて切てかゝれば無蔵もぬいてひらめかす。

此いきほひに恐れをなし。いふにかひなきわかつたう中間ひるがんだうよをひはぎよ。出あへ／＼を力にて皆ちり／＼にぞ逃にける。

『賊哥かるた』第五⁽⁴²⁾

これは加賀郡司師高が源九郎と無蔵という手下を伴って、姉の戸無瀬を襲う場面である。若党・中間が「ひるがんだうよをひはぎよ」といって逃げていくのであるから、ここは「すり」のことは考えにくい。

同じく近松門左衛門の作とされている『田村將軍初観音』⁽⁴³⁾にも「ひるがんだう」の例はみえる。

二人の男ことを見すましあひづの呼子を吹ければこゝかしこの松かげそハかげくま／＼より数十人ばら／＼と取まハす馬かたまん中へとんで出チャさせぬ／＼（中略）やせぬす人のひるがんだうふきやちる様なごまのはひゐなか道者をなぶつて似せくまのゐのつき付うりゆすり／＼へぬ道中の見せしめかたはしからふミ殺さん

やはり襲ってきた男に対して「やせぬす人のひるがんだう……」といっている。むしろ相手をのしることばとるほうがよいかも

しれないが、これも「すり」ではなく「追いはぎ」のようなものとみての発言であろう。

「ヒルガンドウ」の「ガンドウ」は、諸辞書「強盗」の字をあてるように、「がうだう」(『日葡辞書』⁽⁴⁴⁾ Goto)と同じである。

節用集の類ではほとんどの本が「強盗・強黨」二様の表記を掲げる。訓は「カウタウ・ガウダウ・ガウダフ・ガウタウ」などであるが、中で伊勢本略本の亀田本が

強盗(或作／＼黨)

としているのが注目される。この亀田本は「盗人」の訓も「ヌシビト」とあって他の節用集とは異なっているが、「ガンダウ」と「ヌシビト」とは同じ重さではないように思う。

『下学集』・『運歩色葉集』・『塵芥』などにも「強盗」はみえるが、いずれも「ガウダウ・カウタウ・ガウタウ」などであって「ガン」の形はみられない。

ところが『合類節用集』⁽⁴⁵⁾には「強盗」とあって「ガンダウ」の訓が付されている。また『和漢音釈書言字考』⁽⁴⁶⁾では「(強)盗」の右に「ガウドウ」としたうえで、左に「ガン」という音が付されている。

『和漢三才図会』⁽⁴⁷⁾では「盗人」の項に

強盗(俗云質牟／止字)

とあり、さらに「嶺切・家尻切・山賊・海賊」と並んで「強盗」がみえる。

この「ガンドウ」について『倭訓栞』⁽⁴⁸⁾は、

がんだう 強盗の唐音ぎやんだうの訛也といへり

と述べている。「ギヤンダウ」が「強盗」の唐音であり、それが

訛つて「ガンダウ」になったといふのである。「ギャンダウ」については、岡島冠山の『唐話纂要』⁽⁴⁹⁾に見出すことができる。

有ニウ許ヒニ多イト強ウギ盜ヤンダウ
へソコバクノ山ダチ／アリ

また、「強盗」の例ではないが、荻生徂徠の『譯筌初編』⁽⁵⁰⁾につき
 のようにある。

〔強〕 ツヨキト訓ス弱ノ反對ナリ（中略）又俗語ニマサルトヨ
ギヤズアツコウ
ム強似阿哥ハアニマサリナリ

「強」の俗語の発音、つまり唐音は「ギャン」であることを示しているのである。湯沢質幸氏によれば中国語音で宍撰は

中古音 -i^{vu}aq → 唐代音 -i^{vu}ang → 『中原音韻』 -ai

と変化しており、吳音・漢音では通例 a 口形が与えられるとい⁵¹う。冠山や徂徠の「ギャン」の「ン」は韻尾をそのまま写したものと考えることができる。また、『中原音韻』の *gn* であれば、「ガン」となる可能性もある。しかし、これまでのところ「ギャン」と「ガン」とを直接結びつけるような資料を見出すことはできなかった。さて、『応氏六帖』では前述のように七本が「ヒルトビ」、長澤本・黒川本の二本が「ヒルガントウ」であった。『名物六帖』の「白撞」には、長澤本・黒川本と同じ「ヒルガントウ」の訓が付されている。註としては『幼學須知』の書名を掲げるのみであるが、つぎの「白撞賊」はやや詳しい註を載せる。

白撞賊ヒガシドク 類書纂要 白日撞ニ入人家ニ見物便取謂ニ之一ト

この説によれば、やはり「ヒルガンドウ」は白昼の押し込み強盗のことである。

ところで『紀聞小牘』は「白撞」の見出しに『類書纂要』の説を
付す。『類書纂要』は『名物六帖』では今あげた「白撞賊」に採ら

れているが、『紀聞小牘』では「賊」は引用の最後に「――賊」とある。この「白撞」に『紀聞小牘』では「ヒルヌスヒト」という傍訓が付されている。「ヒルヌスヒト」はかなり古くからあったように、『今昔物語』⁽⁵²⁾に例がみえる。また『日葡辞書』⁽⁵³⁾には「昼の盗人、すなわち、図々しい盗人」という註記がみえる。

以上のように、「白撞(賊)」という同一の見出しに対して『応氏六帖』・『名物六帖』・『紀聞小牘』で「ヒルトビ・ヒルガントウ・ヒルヌスビト」という三様の訓がみられた。この中では『紀聞小牘』の「ヒルヌスビト」が、語の説明としては最もわかりやすいであろう。しかし、「ヒルトビ」あるいは「ヒルガンドウ」のほうが、東涯やその周辺の人々にとっては生きた、耳近い語だったのではないか。

『学語編』では「白撞」の見出しの右に「ヒルガントウ」、左に「オシコミ」の訓を付す。『雑字類編』ではやはり「白撞」の見出しの右に「ヒルヌスヒト」、左に「ヒルガンダウ」の訓を付し、「ヒルトビ」はみえない。

いっぽう『画引小説字彙』では「(白) 晝搶奪」という見出しに對して「ヒルト／ンビ」という註を付す。また『俗語解』では「白日撞」の註に「ヒルカンドウヒルトンビ」とみえる。『支那小説字彙』⁽⁵⁴⁾でも同じ「(白) 日撞」^{ジツトウ}の註に「白晝ニ往來人ノ提ル物ヲ取ル／モノ、此方ニ云フヒルトンビ」とある。このように諸書により様々であるが、大部分は「ヒルカンドウ」と「ヒルトンビ」である。

なかでも「ヒルトンビ」は、現在でも京都・岐阜・愛知あたりから岡山・福岡まで、生きつづけている語である。これも「インジン」と同じく、きわめて口頭語的なものを『応氏六帖』が訓として付し

ているとみることができる。

おわりに

「スギダチートンボガエリ」、「インジンイーチウチ・ツブテウチ」、「ヒルトビーヒルガンドウ」という傍訓の比較を通して『応氏六帖』の資料性について考えてきた。最初にも述べたように、これまで『応氏六帖』は『名物六帖』の編集過程の産物以上の位置を与えられていなかった。『名物六帖』の名があまりにも大きすぎたために、そのような位置づけは『応氏六帖』伝本の内部にも無意識にあらわれる。たとえば静嘉堂本は表紙と目録を「應氏名物六帖」としている（本文はすべて「應氏六帖」）。刈谷本は『名物六帖』の目録をそのまま最初に掲げている。もちろんこの目録は『応氏六帖』本文とはまったく一致しないから、刈谷本の書写者は『名物六帖』から目録だけを転載したのであろう。また清水本では表紙題簽を上・下冊ともに「名物六帖」とする（本文はすべて「應氏六帖」）。

しかし『応氏六帖』は『応氏六帖』としての系譜と広がりをもつ資料である。本稿でのこれまでの考察を通して、『名物六帖』やあるいは『紀聞小牘』とは異なる独自の価値をもつ資料としてとらえられることが明らかになった。ただし本稿で明らかにしたのはその可能性と方向性とにとどまる。『応氏六帖』が『名物六帖』や『紀聞小牘』と異なる傍訓を付す項目は多数にのぼるが、そのような例がすべて同じ方向をさしているとは限らない。個々の例についての分析を積み重ねていくことによって、さまざまな角度から『応氏六帖』の独自性と、他資料との共通性とを明らかにしていかなければ

ならないであろう。さらにいくつかの項目について簡単にふれておく。「鑛倉」は『応氏』に「ホソイリ」、『名物』に「ヤジリキリ」の訓がみられる。「ヤジリキリ」は例を見出すことの容易な語であるが「ホソイリ」は『日葡辞書』に見出しただけである。『応氏六帖』の書写者にとっても「ホソイリ」はなじみの薄い語であつたらしく、神宮本・早大本「ホリイリ」、刈谷本「ホソイソ」、多和本「ホツイリ」のようにする。また、「ヒルトビ」と同様、長澤本・東大本は「ヤジリキリ」の訓を付し、他の八本と異なる。

「井欄」の「キツ、」（『応氏』）と「キトヤカタ」（『名物』）、「烟臺・烟墩」の「モノミ」（『応氏』）と「ヒノミヤクラ」（『名物』）は『名物六帖』が新しい語形を採用していった例と考えられる。

「単列」の「イツキウチ」（『応氏』）と「イツキタチ」（『名物』）、「関轡」の「ジキサウ」（『応氏』）と「カゴソ」（『名物』）は『名物六帖』の訓のほうが見出し語の意味を正確に伝えている。

中村幸彦氏は『名物六帖』人品箋将校兵卒の条について、自筆底本と刊本との訓を比較し、「東涯のは意識であるが、出来るだけ日本語の単語で訳を与えようとした。為に宝暦ではやや古い語感のものになっている。刊本のは出来るだけ原意を忠実にあらわそうとした為に、やや生硬になった。しかし語感新しくなっていると云える。」⁽⁵⁵⁾と分析している。さらに資料の幅を拡げ、言語の地域差なども考えながら検討を重ねていきたい。

(註)

1 『名物六帖』は昭和五十四年に朋友書店から影印刊行されている。板本四帖分に未刊部分を稿本によって補ったものである。天理図書館複製

第58号。

- 2 荒尾禎秀氏「雑字類編と名物六帖」『東京学芸大学紀要第二部門人文科学』25（昭和四十九年一月）。
- 3 「昭和九年壬辰九月」の刊記、「脇坂仙二郎・浅井庄右衛門・小林庄兵衛」の書肆名をもつ本によった。書肆名の異なる本の影印が「唐話辞書類集」第十六集に収められている（昭和四十九年汲古書院刊）。
- 4 『日本古典文学大辞典』「名物六帖」の項。清水茂氏執筆。
- 5 最近のものとしては徳田武氏『北里愍愍録』白話語彙出拠考——特に「名物六帖」との関連において——『國語と國文學』（平成元年十一月）がある。
- 6 中村幸彦氏「名物六帖の成立と刊行」『ビブリア』17 後に「中村幸彦著述集」に収録。
- 7 十本のうち山田本・黒川本は山田忠雄氏の御厚意により写真を入手することができた。記して感謝申し上げる。長澤本は「唐話辞書類集」第十二集の影印によった。多和文庫本は国文学研究資料館のマイクロフィルムならびに紙焼写真によった。
- 8 「応氏六帖の諸本」『辻村敏樹教授古稀記念論文集』掲載予定。
- 9 以下、引用に際して、細字双行は「へ」で示す。／は改行を示す。
- 10 「寛永癸酉仲秋吉旦／豊雪齋道伴新榮行」とある板本によった。『八語学資料／としての／中華若木詩抄（校本）』（清文堂 昭和五十二年三月）によれば引用部分に大きな異同はない。
- 11 「近世文学資料類従 仮名草子編」②④（勉誠社 昭和五十二年四月）所収の影印によった。
- 12 『増補俚言集覧』（明治三十三年）の昭和四十五年複製本によった。
- 13 『初期俳諧集』（「新日本古典文学大系」岩波書店 一九九一年五月）所収の本文によった。
- 14 「正保四歳正月吉日 二條通鶴屋町 田原仁左衛門梓行」とある早大図書館蔵本によった。
- 15 『改訂新版文明本節用集 研究並びに索引』影印編（勉誠社 昭和五十四年九月）によった。
- 16 『古今著聞集』（「日本古典文学大系」岩波書店 昭和四十一年第二刷

- ・昭和四十九年第九刷）の本文によった。
- 17 『世阿弥芸術論集』（「新潮日本古典集成」新潮社 昭和五十一年発行・平成元年第九刷）所収の本文によった。
- 18 『元龜二年／京大本』運歩色葉集』（臨川書店 昭和四十四年十二月初版・昭和六十三年一月再版）の影印によった。
- 19 『元和三年版下学集』（新生社（昭和四十三年三月）の影印による）には「取次筋斗」とある。『慶長五年本節用集』（清文堂（一九八九年二月）『慶長／五年本』節用集・国尽・葉種いろは抄）所収の影印による）にも同様の例がみえる。『台類節用集』（勉誠社（昭和五十四年二月）の影印による）でも「取次筋斗（又云／菩薩）四度路」と、やはり「取次筋斗」に「シドロモドロ」の訓が付されている。どのような経緯でこの両者が結びついたのかは不明であるが、「筋斗」と「モンドリ」との結びつきがかかわっているかもしれない。なお東涯の随筆『乗獨譚』（『日本随筆大成』巻六（吉川弘文館 昭和二年九月）による）に「取次ノコト」として「取次」を「シドロモドロ」と訓ずることについて述べている。しかしそこには「筋斗」についての言及はない。
- 20 「唐話辞書類集」第七集（汲古書院 昭和四十七年二月）所収の影印によった。なお「唐譯便覧」には東涯の序文を載せる。享保十一年とあるが、「名物六帖」の最初の刊行は翌享保十二年である。
- 21 「唐話辞書類集」第十一集（汲古書院 昭和四十七年・四十九年）所収の長澤本影印によった。なお十一集には、桂川中良が項目をいろは順から画引、頭字別に排列しなおした静嘉堂本の影印も収めるが、こちらは完本ではなく、「翻金斗」はみえない。
- 22 「唐話辞書類集」第十七集（汲古書院 昭和四十九年九月）所収の影印によった。この影印の底本は、長澤規矩也氏の解題によれば、富永辰の書写増補自筆稿本である。また、「文化十二年九月騰写大野伴蔵々」という識語のある早大本では「トンボガヘリ」、引用末尾は「能立」となっている。「唐話辞書類集」第二集（汲古書院 昭和四十五年五月）所収の影印『語録譯義』は同内容の本を千手興成の増補した写本を底本としている。これによれば「トンボウガヘリ」・「倒立」となっている。
- 23 「寛政三年辛亥十一月」の刊記、「風月莊左衛門、渋川與左衛門、泉本

- 八兵衛、山口又一郎」の書肆名のある板本によった。同じ刊記・書肆名をもつ板本が「唐話辞書類集」第十五集（汲古書院 昭和四十八年十二月）に影印収録されているが、見返の朱印が異なる。影印は「浪華心齋／橋北街崇／高堂發行」という印であるとのことであるが（同解題による）、使用した板本の朱印は「浪華心齋／橋通山口／贈春堂記」とある。
- 24 引用における（ ）は、原本の頭字を―で示してあるところに頭字を補ったことを示す。
- 25 「唐話辞書類集」第十三集（汲古書院 昭和四十八年七月）所収の影印による。
- 26 註（2）参照。
- 27 「天明丙午六月 汎愛堂藏板」の刊記、「丹波屋甚四郎、藤屋弥兵衛、村上勘兵衛、植村藤右衛門、俵屋清兵衛」の書肆名のある板本によった。
- 28 岩波文庫（一九九〇年七月）の本文によった。
- 29 講談社文庫（昭和五十八年二月）の本文によった。
- 30 註（6）参照。
- 31 「かたこと」は『近代語研究』第三集（武蔵野書院 昭和四十七年印刷・昭和五十六年再版）所収の影印によった。
- 32 『蜆縮涼鼓集』は「駒沢大学 国語研究 資料第一」（汲古書院 昭和五十四年九月）の影印によった。
- 33 印地については『義経記』（古典文学大系）岩波書店 昭和三十四年第一刷・昭和五十一年第十五刷）の補注に詳細な論考がある。また、半澤敏郎氏『生活文化歳事史』第三卷（東京書籍 一九九〇年十月）の「印地（打）」の項もきわめて詳細である。
- 34 『平家物語』下（『日本古典文学大系』岩波書店 一九六〇年第一刷 一九七八年第十九刷）の本文によった。高野本影印（笠間書院 昭和四十九年一月）には「むかへつふていんち」とある。『平家物語百二十句本』（高橋貞一校訂 思文閣 昭和四十八年）には「ゐんの御所には、山ぼうしてらぼうし、京中のむかひつぶせ、いんち、いひがひなきくはんじやばらがやうなるもの共を、めしあつめて」とある。『天草版平家物語』上（勉誠社文庫一九七九年第三刷）には「amia Giōgūni tchutemur/cai, inji nadono jūru tchurenno monde gozatia」とある。
- 34 『近世／前期』歳時記十三種本文集成並びに総合索引」（勉誠社 昭和五十六年十二月）所収の影印による。
- 35 題簽「増補」合類大節用集〇〇再版、「明和三丙戌歳孟春 再版」の刊記、「村岡勘兵衛、丹波屋甚四郎、本屋又兵衛」の書肆名のある板本によった。
- 36 『和漢三才図会』（吉川弘文館 明治三十九年十一月）の縮刷影印によった。
- 37 早大図書館蔵の無刊記本によった。同図書館には写本一部も蔵されているが、「河原陰陣」に異同はない。
- 38 「日本随筆大成」巻十（吉川弘文館 昭和三年一月）所収の本文による。なお、この『東臚子』には『名物六帖』の名もみえる。
- 39 『大漢和辞典』には「陣」字の下に「④陳の俗字」とし、「陳」字の下に「③そなへ。いくさ。陣に通ず」としている。
- 40 『物類称呼』（古典資料）20 藝林舎 昭和四十七年）の影印によった。
- 41 「新潮日本古典集成」の本文によった。
- 42 「近松全集」第十卷（大阪朝日新聞社 昭和二年十二月）所収の本文によった。
- 43 『浄瑠璃集』一（『早稲田／大学蔵』資料影印叢書）早稲田大学出版部 昭和五十九年）所収の影印によった。
- 44 『邦訳日葡辞書』（岩波書店 一九八〇年五月）によった。
- 45 註（19）参照。
- 46 註（35）参照。
- 47 註（36）参照。
- 48 『増補／語林』和訓栞 後編（名著刊行会 昭和四十八年五月）の影印による。
- 49 「享保三戊戌正月日」の刊記、「出雲寺和泉掾」とある板本によった。
- 50 「唐話辞書類集」第六集（汲古書院 昭和四十七年一月）に影印がある。「正徳甲午歳正月吉日／洛東知恩院門前／澤田吉左衛門刊行」とある初刻三卷本によった。宝暦再版にも異同はない。『譯筌初編』は「荻生

徂徠全集全集」第二卷言語篇に影印が収載されている。山田孝雄博士は『國語の中に於ける漢語の研究』（寶文館 昭和十五年四月）第五章「唐音」において「唐音の學ははじめ通譯の爲にのみ行はれしものなるが、享保の頃より一個の學術たる姿を呈しぬ」として、岡島冠山・雨森芳州について荻生徂徠の名を挙げ「この人はかねて唐音を學びたりしが、後冠山に就き、その門下と共に學びたり。その門下には唐音に熟せる人少からずして、唐音を用ゐて漢文を直讀すべきことを盛に鼓吹せり。」と述べる。

51 湯沢質幸氏『唐音の研究』（勉誠社 昭和六十二年二月）84ページ

52 「此ハ晝盜人ノ入^{イニタル}コソ^ニ有^{ケレ}ト」思^{サモヒ}テ、枕上^{マシラガ}ナル大刀^{オノタチ}ヲ取^{トル}ム、（以下略）『今昔物語集』五 卷第二十九第四（『日本古典文学大系』岩波書店一九六三年第一刷・一九八一年第九刷）

53 註（44）参照。

54 「俗語／訓譯」支那小説字彙」の題簽、「明治四十三年二月」の刊記のある本によった。

55 註（6）参照。